
【脚本風】ミッドナイトブルーに包まれて

があわいこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【脚本風】ミッドナイトブルーに包まれて

【Nコード】

N5605H

【作者名】

があわいこ

【あらすじ】

「科学忍者隊ガッチャマン」の脚本風ファンフィクション。ジョーが怪しい女性のを追って単独行動に出る。ギャラクターの鉄獣メカ「ダイネツコ」に襲われるガッチャマンたち。夢のリゾートアイランドに潜む謎とは？

（前書き）

2009年04月30日 I Love George Asakura

（*・^・^*）に初掲載

科学忍者隊ガッチャマンのファンフィクションです。

脚本風になっています。

読みづらいかも知れませんが、ご一読くだされば幸いです。

（プールサイドで日焼けするカップル、遊園地ではしゃぐ子供たち、ディナーを楽しむ老夫婦など、南の島のリゾート地でくつろぐ人々の静止画がスライド写真のように映し出される。）

（三日月基地内の一室。南部博士は忍者隊にヘルシー島のスライド写真を見せながら豪華な施設を説明している。）

南部博士：諸君。ここが無公害エネルギーを使用し、自然を活かして作られたヘルシー島のデゼニー・パークだ。

ジンペイ：へー、うわさには聞いてたけどよ。すっげーなあ・・・。

リュウ：オラ、知つとるぞい。アタレヤ国の名もなき離れ小島だったヘルシー島に、いまをときめくデゼニー社が巨額の資金を投じて造った夢のリゾートアイランドで、その環境に配慮された設備の数々は国際科学技術庁も注目しちやるんじゃないのう？

南部博士：うむ。その通りだ、リュウ。

ジンペイ：へー。リュウがこんなモダンな島のことをよく知ってたモダン・・・じゃない、知ってたもんだ・・・。

リュウ：オラ、新婚旅行はココって決めちよる。

ジンペイ：おーおー。よく言うよ。アテはあるのかい？おヨメさんのぞ。

リュウ：まだ時間があるからのう。よく考えてゆつくり探すんだわ。

ジンペイ：なぐんだ。そんな事だろうと思ったよ。そういうのをね、「取らぬ狸の皮算用」っていうんだぜ。

リュウ：なんだと！オラのカミさんになる子はタヌキなんかじゃないわい！

ケン：まあまあ、ふたりともそのくらいにして博士の話の続きを聞こうじゃないか。で、博士。こんな立派な施設に何か起きたというわけですね？

南部博士：そうだ。この飲料水は、この島の中央に広がっているジャングル地帯に降った雨水をろ過したものが使われている・・・いや、使う予定だったのだ。その画期的な技術に国際科学技術庁が注目していたのだが・・・。

ジョー：毒でも入っていたんですか？

南部博士：うむ。毒とまではいかないが、不純物が混入してどううしても取り除けないというのだ。

ジンペイ：なんだあ。毒じゃないんだったら、ちょっとくらいどうってことないや。ねえ、お姉ちゃん。

ジュン：あら、私はイヤだわ。直接身体に入るものに不純物が混ざっているなんて。それも毎日飲む水でしょう？

ジンペイ：へえっ？！そんなもんかねえ？

南部博士：ジュンの言うとりだ、ジンペイ。人間の体の約65%、つまり半分以上が水でできているのだ。そしてその水は主に飲料水から摂取している。

そして特にジンペイ、君のような子供は約70%、このくらいまでは水でできているのだ。

（博士、ジンペイの首のあたりに手をやる。）

ジュン：どう？ジンペイ。アンタのここまですべて不純物が混ざってるとしたら？

ジンペイ：（あわてて）えっ！やだよ。オイラ……。やっぱり・・・あゝ、びっくりしたなあ、もう！

（みんなクスクス笑う）

南部博士：そこでだ、諸君。この水の汚染源をまず探ってほしいのだ。

ケン：わかりました、博士。さっそくゴッドフェニックスで向かいます。命令を出してください。

南部博士：いや、今回はゴッドフェニックスは使わずに行くのだ。

ジョー：ええっ？！

リュウ・ジンペイ：アララ。（ズッコケる）

南部博士：今回は国連軍のヘリでヘルシー島の上空まで行き、ジャングル地帯へ直接降下するのだ。

デゼニー社からの招待は2日後だ。その前に一度こっそりと下見をしておきたいだろう？

ジョー：こいつは面白くなってきた。いーぜー！

リュウ：と、いうことはオラも・・・？

南部博士：ああ。頑張ってきてくれたまえ。

リュウ：うへへへ。

ジンペイ：あゝ、でも博士。帰りはどうやって？？

南部博士：うむ。他の観光客に混ざって普通にフェリーに乗って帰ってくればよい。

ジンペイ：なるほど・・・。

ジュン：ジンペイ、いくわよ。

ジンペイ：は、はい。はい。

（軍用ヘリの中。ヘルシー島上空。）

ケン：よし。いくぞ！科学忍法、スパイラル・シューター！！

ジョー：よっ。

ジュン：はっ。

ジンペイ：やつ。

リュウ：それっっ！！

（5人はクルクルと輪を描きながらジャングルへと降下していった。）

（ヘルシー島に降り立つ諸君。）

（目の前には美しい湖が広がっている。）

ジュン：わぁ。きれいな〜。

リュウ：これが水源地かの〜？

ケン：しっ！誰か来る！

（全員それぞれ木の影にかくれる。）

（枯れ木や木の根っこを積んだ大型トラックが湖岸にやってくる。）

（トラックから降りてきたのはデゼニーの社長と部下が1人。）

ジンペイ：あれ？あれはデゼニーの社長さんだ。

ジュン：しっ！

ジョー：どうする？ケン。

ケン：しばらく様子を見よう。

社長：（あたりをうかがって）よし。さっさと片付けるんだ。

部下がスイッチを入れるとトラックの荷台が傾いて枯れ木などがすべて湖に沈んでしまう。

社長：これでよし。さ、帰ろう。

（トラックが去ってしまう。）

（顔を見合わせる諸君。）

ケン：あれだ。不純物の原因は。

ジョー：だとすると社長さんは知っていたことになるぜ。

ジンペイ：アニキ、どうする？

ケン：うん．．．あの社長さんから、わざわざ調査のご招待をいただいているんだ。

きつと、裏に何かある。

ジョー：へっ、ちょいとあの社長をしめあげりゃ．．．

ケン：いや、今日はここまでにしよう。もうすぐフェリーが出る時間だ。行こうぜ。

（大空を飛ぶゴッドフェニックス。）

ナレーション：改めてデゼニー株式会社からの依頼を受けた科学忍者隊はゴッドフェニックスでヘルシー島へと向かった。

（ゴッドフェニックスの中）

ケン：いいか、みんな。ジャングルの中で見たことは、しばらく黙っているんだぞ。

ジンペイ：分かってるって、アニキ。でもよー、なんで原因が分かっているのに調査を依頼してきたんだろうかねえ？

ジョー：それを探るのも、今回のオレたちの任務って言うわけさ。

ジンペイ：ちえ。ギャラクターが相手じゃないと、なんか、こう、力が出ないというか、いまいち燃えないというかさ・・・。

（と、シャドーボクシングをする。ヘルメットがまぶかになる。）

ジョー：へへっ。ジンペイ、ギャラクターが出てきたらたのむぜ。

ジンペイ：出るかな？ジョーのアニキ。

ジョー：出るな。

ジンペイ：へー、ずいぶんと自信があるんだね。

リュウ：ケン、ヘルシー島が見えてきたぞい。

ケン：よし。管制塔の指示通りに着陸させるんだ。

リュウ：わかった。

ジョー：おい、ケン。まともに行って大丈夫か？

ケン：ああ。今回は表向きにしる調査依頼をわざわざしてきたんだ。来た早々いきなり爆破なんていうことはないだろうよ。

（空港に着陸するゴッドフェニックス）

（一方、総裁Xの部屋にはベルク・カツツエが控えていた）

総裁X：カツツエよ、ギャラクターの秘密を知ったデゼニの社長をうまく始末できるのか？

カツツエ：はい。都合よく社長を恨んでいる女がおりますので、そやつを利用して暗殺させようかと・・・。

総裁X：女？女は力が弱いぞ。大丈夫なのか？

カツツエ：はい。あの社長は島民にはジャングルの木を一本たりとも切らないで遊園地を作ると約束したにもかかわらず、たくさんの木を伐採して湖に捨てておりまして・・・。

総裁X：ヘルシー島の地下に眠るウラン鉱脈を発見し、湖底から採掘を始めようとしていたギャラクターと鉢合わせになったというわけだな。

カツツエ：そこで、社長には科学忍者隊をおびき寄せれば秘密を守ってやるというてあります。

社長があのにっくき科学忍者隊を湖底基地の迷路に誘いこんだところで・・・。

総裁X：もし失敗したら？

カツツエ：そのときは鉄獣ダイネットコを出動させればもう万全でございます。総裁。

総裁X：そうか。あのウラン鉱脈は地球征服にはなくてはならないものだ。

社長と科学忍者隊を抹殺してすべてを奪うのだ。よいな？

カツツエ：ははっ。

（空港のロビーでは社長が諸君を出迎えている）

社長：ようこそ来てくださいました。デゼニー株式会社の社長、デゼニーです。

ケン：今日のご招待ありがとうございます。国際科学技術庁の南部博士からもよろしくとのことですよ。

ジンペイ：（内緒話で）お姉ちゃん、リュウは？

ジュン：ケンに言われてゴッドフェニックスを別の場所へ移動させに行っただわ。

社長：これでみなさん、お揃いですか？

ジョー：いえ、もう一人。のろいのがいるんですよ。いや、すぐ来ますがね。はははっ。

リュウ：いやゝっ。すまんすまん。待たせちゃったのう。

ジンペイ：遅いよ、リュウ。

リュウ：思ったより道が混んでいてのう。はっはっ・・・ん、んっ？

デモ隊の声：デゼニーは汚いぞっ！・・・真実を公表しろっ。

リュウ：ん、んっ？何の騒ぎじゃ。一体？

（ロビーにデモ隊が押しかけている。警備員が押し戻そうとしている。）

（デモ隊の先頭に美しい女性がひとり黒いリボンがかかった写真を掲げている。その写真がクローズアップされると素顔のジョーにそっくりである。）

デモ隊の声：ジョナサンをかせせー。社長を辞めろっ。ちゃんと謝罪しろっ。

ケン：あれは何の騒ぎですか？

社長：いやいや、たいしたことではありません。ここを建設しているときに作業員が一人、事故で亡くなりましてね。その遺族がいま

だに私のことを目の敵にして、ときどきああして抗議に来るんですよ。

まったく迷惑なことです。（汗を拭く）

ジョー：あの写真を持った女性は？

社長：亡くなった作業員の婚約者だった人らしいのですが、私はよく知りません。（汗を拭く）

ジンペイ：いや、それにしてもあの写真の顔は・・・。

ジュン：ジンペイ！何を言い出すの？！

ジンペイ：いつけねえ。オイラもうちよつとで・・・あれっ？！
ねー、おねえちゃん。ジョーのアニキは？

ジュン：今までここにいたわよ。あら、やーねえ。どこへ行っちゃたのかしら？

（こっそりとデモ隊の後を追うジョー。）

（街はずれの広場でデモ隊は解散。「ごくろうさま。」「またがんばろう。」「ありがとう。」「などと挨拶を交わす。）

（写真を持った女性はひとりで路地の奥にある小さな家へ帰っていた。）

（その様子を陰にかくれて見ていたジョー。一瞬姿を消すと素顔になって現れる。）

（女性の家のドアをノックするジョー）

（ドアを開けた女性はハッと驚くが、突然ジョーに抱きつく。）

女性：ジョナサン！帰ってきてくれたのね！やっぱり死んでなんかいなかったんだわ！

ジョー：あ。い、いや。オレは・・・。

女性：えっ？（ジョーをじっと見つめる女性）

・・・違うわ・・・よく似ているけど、あなたはジョナサンではないわ。

ジョー：そんなに似ていたかい？

女性：ええ。でも、ジョナサンはここにホクロが・・・。（と、ジョーの口元に手をやる。）

ジョー：（少し照れながら、その手を握り返すと握手をする）俺はジョー。さつき空港で君たちのことを見かけてあとをつけて来たのさ。君、名前は？

女性：私、ミシエルよ。

ジョー：ところで、ミシエル。この島のジャングル地帯のことで聞きたいことがあるんだが？

ミシエル：なんですって？！

ジョー：あのデゼニーの社長さんのことで知ってることがあるだろ

う?!

ミシエル：あ、あなた・・・まさか・・・。

（次の瞬間、ジョーがエアガンを出すのとミシエルがナイフを出すのが同時だった。）

ミシエル：ジョー、やっぱり。ギャラクター。

ジョー：なに?! そういうおめえこそギャラクターだろう?!

ミシエル：ギャラクターを知っているのが何よりの証拠さ。

ジョー：なら、おめえは何で知ってるんだ? ええ?!

ミシエル：ふ・・・ん、（ナイフを下ろす）やるがいいさ、ジョー。さあ、私を撃って。ジョナサンのところへいけるから・・・。

ジョー：う・・・。わかったよ、ミシエル。（エアガンをしまいながら）だが、オレはギャラクターじゃないぜ。ギャラクターに殺されたんだ。オレの両親は・・・。

ミシエル：ご両親が・・・殺されたの?

ジョー：ああ。だからオレはいつかヤツらに復讐してやるんだ。

ミシエル：ジョー・・・。こっちへ来て。（思いつめたような顔でジョーの手を握り部屋の奥にあるカーテンの中へとジョーを引っ張って入って行く）

ジョー：ミ、ミシエル・・・？そんな・・・オ、オレは・・・。

（カーテンの中は小さな部屋になっていた。そこには暗青色の布がかけられた祭壇があり、中央にはジョナサンの遺影がかけられていた。）

ジョー：へえ。こういうのには黒い布を使うものだと思っていたぜ。

ミシエル：ええ。彼がこの色が好きだったものだから。ミッドナイトブルーっていうのよ。

ジョー：それでミッドナイトブルーに包まれてるってわけか。

ミシエル：ええ。（祭壇の布の下からカセットテープレコーダーを取り出す。そこには、ギャラクターのマークがはっきりとついていました。）

ジョー：これは・・・？（目が鋭くきらりと光る）

ミシエル：一週間ほど前に届いたの。ギャラクターから。ジョナサンの仇をとってやるから、ギャラクターに入らないかって。^{かたき}

ジョー：なんだって！？

ミシエル：これから返事をしにジャングルの湖まで行くのよ。

ジョー：ミシエル、おめえ・・・まさか・・・？

ミシエル：ジョー、あなたには悪いけど私、ギャラクターに入ってジョナサンの仇を討ちたいのよ。

ジョー：じゃあ、なぜこの話をオレに？

ミシェル：さあ・・・？あなたがジョナサンに似ていたからかしら。

ジョー：わかったよ、ミシェル。邪魔したな。

ミシェル：帰るの？止めないのね。

ジョー：ああ。好きにしたらいいさ。（出ていく）

ミシェル：ジョー・・・。

（カセットを持って家を出るミシェル。こっそりとバードスタイルのジョーがあとをつける。）

（場面変わって、郊外の田舎道を進む一台のマイクロバス。派手な塗装が施されている。）

ナレーション：一方、ガツチャマンたちは社長自らが運転する観光用のマイクロバスに乗り込み、水源地へと向かっていた。

社長：この先が島の中央ジャングル地帯になっていまして、水源地の湖があります。

（前の席で眼を閉じたまま何かを考えているケン。リュウは一番後ろの席で大イビキをかいている。ジュンとジンペイは遊園地のパンフレットを見ている。）

ジュン：湖やジャングルのことはパンフレットに書いていないんで

すね。

社長：は、はい。遊園地とは直接関係ないものですから・・。

ジンペイ：へー、そんなもんですかねえ。

社長：（汗を拭く）

（社長、車を止めて外に出る。）

社長：ここが湖の入り口です。ここからは歩いていきます。

（湖畔の見張り小屋まで来ると社長は門柱のボタンを押す。ボタンが光って門が開く。――ギャラクター基地のボタンが光る。それを見たカツエがうれしそうにモニターのスイッチを入れる。社長と忍者隊がモニターに映る。）

カツエ：来た来た。ガッチャマンめ、何も知らずに社長のあとにくつついて来よった。ファハハッ！今日こそ地獄へ送ってやるかな。

ギャラ兵：カツエさま。ミシエルと名のる女がカツエさまに会わせると来ておりますが・・。

カツエ：なに？ミシエル・・・？おおー、そうかそうか。とうとうギャラクターに入る決心をしたんだな。よし、ここへ通せ。

ギャラ兵：はっ！

（一方、ガッチャマンたちは、見張り小屋の中へと案内されていた。

）

社長：ここに問題の浄化装置があるのですが・・・。
ス、スイッチを入れてみますか？

ケン：はい。お願いします。

（社長がスイッチのレバーをガタン！と下げると、床が落とし穴になって地下室へ社長もろとも落ちてしまう。）

ジンペイ・リュウ：ウワッ！

ケン：社長さん、これは一体どういうことですか？

カツツエの声：ファハハハッ！ガツチャマン、まんまとワナにかかりおったな。デゼニの社長さん、ごくろうだったな。おかげで、ニツクキ科学忍者隊をやっつけることができそうだ。

社長：カツツエさま、科学忍者隊をつれてくれば湖の底に沈めた木の根っこを片付けてくださるという約束は・・・？

カツツエ：あゝあ、片付けてやるとも。おまえや忍者隊ともどもきれいさっぱりとな。

社長：だましたな！カツツエ！

カツツエ：今頃気づいても遅いわ。サラバだ、諸君。

ジンペイ：くっそ、いつもながら汚いぞ！カツツエ！

社長：（土下座して）許してくれ、ガツチャマン。私が馬鹿だった。内緒でジャングルの木を伐採して湖の底に沈めていたのだがギャラクターのやつらに見つかってしまい、黙っていてやるから科学忍者隊をここへ連れてくるように言われたのだ。す、すまなかった！。

（土下座をしている社長をモニターで見ているカツツエ）

ギャラ兵：カツツエさま、ミシエルをつれてまいりました。

（ミシエルが入ってくる）

カツツエ：おー、ミシエル君。よく決心したな。ギャラクターに入ったお祝いにさっそく仇を討たせてやろう。モニターを見たまえ。

ミシエル：うっ、デゼニー。一緒にいるのは科学忍者隊？！

カツツエ：どうだね？ミシエルくん。このスイッチを押せば天井が落ちてきて社長はペシャンコだ。あっという間に仇がとれるぞ。フアハハハハ。

（ミシエルはボタンに手をかけるが、その手は震えていてなかなかスイッチが押せない）

（同じく肩を震わせている社長）

ケン：社長さん、よく言うってくださいました。

社長：へ？（顔を上げる）

ケン：実は、事前に湖を調査したのです。なぜ社長さんがうそをついてまでわれわれをここに呼び出すのか知りたくてワナにはまった

フリをして来たのです。

社長：（涙をこぼしながら）わ、ワシは怖かったんじゃ。同じようにギャラクターの秘密を知った現場監督のジョナサンが、こっそり国際科学技術庁に連絡をしようとしてギャラクターに殺されたのを見てしまつて・・・！

ケン：そうだったんですか。社長さん、ギャラクターの基地の入り口をご存知ですね。

社長：み、湖の下です。地下通路でつながっています。

ケン：そうとわかれば・・・ジュン、ジンペイ！あのドアを爆破するんだ。

ジュン：まかせといて。

ジンペイ：それーっ。

（ヨーヨーと爆薬を仕掛けたクラッカーを同時に投げてドアを破壊する）

（リュウがマントで社長を守る）

ケン：よし！いくぞ。

カツツエ：（モニターを見ながら）ばかもの。もたもたしているから逃げられてではないか？！

うゝん。こうなれば基地ごと爆破してやるー。

お前は私と来るんだ。

（ミシエルを引っ張って隠し扉の向こうへ消える）

（入れ替わりにガッチャマンたちが基地内にやってくる）

ケン：ここだな。

（ギャラ兵たちの一斉銃撃）

（それをかわして4人それぞれが、つぎつぎとギャラ兵をやっつける）

ケン：カツツエ、どこにいる？出て来い！
くそう、カツツエめ。逃げたな。

（ジュンが時限装置に気づく）

ジュン：ケン！たいへんよ。もうすぐこの基地は爆発するわ！

ケン：なんだって？しまった！すぐに脱出するんだ。

（社長とともに基地から脱出したガッチャマンたちだが、地下通路が入り組んでいて途中で迷ってしまう。）

ケン：く、くそう。どっちが出口なんだ？

ジンペイ：おねえちゃん、もうだめだ！

ジュン：ジンペイ、最後まであきらめちゃだめよ。

ジョー：おい、ケン！こっちだ。

ケン：ジョー、どうしてここに？

ジョー：そんなことはどうでもいい。早くこっから出る方が先だぜ。

（見張り小屋の出入り口にやっとたどり着き地上へ出る忍者隊。）

（その時、湖が大きく盛り上がって枯れ木を吹き飛ばしながらダイネツコが出現する。）

（あつという間に忍者隊に追いついたダイネツコが目前に迫る。）

リュウ：うわっっ。

ジョー：こ、こいつー。

ジュン：早く逃げないと踏みつぶされてしまうわ。

ジンペイ：おねえちゃん！

（ダイネツコの操縦席にはカツツエが。）

カツツエ：ミシエルくん、よく見たまえ。君の婚約者の仇きがもうすぐ討てるぞ。

（ミシエルは操縦席の後ろにしがみついて泣いている）

ミシエル：（心の中で）ジョナサンを殺したのは社長ではなくてギヤラクターだったんだ。何とかしてガツチャマンたちを助けなければ・・・。

ケン：リュウ！ゴッドフェニックスはどこに隠してあるんだ？！

リュウ：あの背の高いヤシの木の下だわ。

ケン：よし！オレがやつを引きつけておくからその間に乗り込むんだ。

いいな、ジュン。社長さんを頼んだぞ。

ジュン：オッケー。

ケン：バードラン！（ダイネッコにブーメランを投げるがはね返されてダイネッコが健に迫る）

（間一髪でゴッドフェニックスがダイネッコとケンの間に割って入る。）

（素早くゴッドフェニックスに乗り移るケン）

（と、同時に見張り小屋や湖が大爆発）

ケン：（ゴッドフェニックスのコックピットに戻って）よし、ジヨー、バードミサイルだ！

ジヨー：ま、待ってくれ。ケン。

ケン：なにに？！

ジンペイ：あれ〜っ、今日はなんかいつもと逆だぞ〜。

ジョー：あの中にはミシエルが・・。

ケン：誰だってえ??

（その時大きな爆発音とともにダイネツコが自爆。カッツェは角の部分から脱出用の小型ロケットで逃げる）

ジョー：ミ、ミシエル~~~~!!（ゴッドフェニックスから出ていく）

ケン：ジョー！どこへいくんだ？まだあぶないぞ。

ジュン：ジョー、やめて。

ジョー：ミシエル、死ぬな〜！

（ダイネツコ最後の大爆発。ダイネツコから放り出されるミシエル）

ジョー：しまった

ジンペイ：ジョーのアニキ〜！

（ミシエルが倒れているところに駆けつけるジョー。素顔に戻っている）

ジョー：ミシエル、ミシエル。しっかりするんだ。（ミシエルを抱き起こす。）

ミシエル：（眼をあけて）ジョー・・・。私思い知ったわ。復讐がどんな結果を招くのか。・・・また誰かが死ぬだけよ。

ジョー：ミシエル、死んじゃいけない。

ミシエル：でも、ジョーの・・・仇きはとっ・・・たわ。鉄獣の・・・自爆スイッチを押して・・・やったの。カツエは・・・吹っ飛んだ・・・でしょう？

ジョー：ああ・・・。

ミシエル：よかった。（うつすら笑う）これで・・・復讐は・・・終わったわ。ジョー・・・だからあなたは・・・死んではだめよ。ジョー・・・うつう・・・。（首がぐりとなる）

ジョー：ミシエル・・・ミシエルーッ！！（強く抱きしめると涙する）

（夕焼け空の中ゴッドフェニックスがジョーに近づいてくる。頬と頬を合わせるようにしてミシエルを抱いたままのジョー。ゴッドフェニックスは飛び去っていく。）

（夕日とゴッドフェニックスのラストシーン）

ナレーション：ベルクカツエもギャラクターもまだ滅びてはいない。

だがジョーはそのことをミシエルには言えなかった。

それが本当になるその日まで、がんばれコンドルのジョー。戦えガツチャマン！（おしまい）

（後書き）

読んでいただいております。ありがとうございました。

ガッチャマンのファンフィクは他にもありますのでよかったです。読んでください。

BLものも一点ですがムーンライトの方にあります。

興味がある方はどうぞ。作家名は同じく「があわいこ」です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5605h/>

【脚本風】ミッドナイトブルーに包まれて

2010年10月15日22時28分発行